

1984年は小原先生が春高監督である最後の年。

「親子鷹」として入学当初から期待された瀬上裕司が気を吐いた。

### ★親子鷹

父親は高13回 インターハイ円盤投げ2位。田中誠四郎先輩はハンマー投げ優勝、砲丸でも6位に入って二人で計12点をたたき出し、春高を総合7位につけた猛者である。



昭和35年 神戸インターハイ  
大島 節夫（現：瀬上 高13回卒＝右）  
円盤投 2位  
田中誠一郎（高13回卒＝左）  
ハンマー投優勝、砲丸投 6位

瀬上は2年生で47mを投げ名古屋インターハイに出場。

数センチ差で9位という悔しい思いが、冬来トレーニングをさらに熱くした。

翌年の1984年のシーズンから後、瀬上裕司、その弟の瀬上健司らを作る「瀬上親子伝説」（以下敬称略）は長く語り継がれることになる。

瀬上の砲丸投げも県では他を寄せ付けないものがあった。そのグライドから流れるような美しく速い突出しは、周囲の視線を釘付けにした。2位を2mほど引き離す大きな投擲は、美しい弧を描き16m地点を大きく超えた。  
撮 野本（1984）

★「スーパーテクニック」 高校生離れした円盤投げ技術

瀬上裕司は身長180cmではあるが、体重は70キロ台程度の「超軽量」。  
関東大会以降、よく跳躍選手に間違われたものだ。周囲は90キロ近い巨漢ばかり。  
ではなぜ投擲が強いのか？もちろん優れた筋力、反力、神経を持っているのはもちろん  
だが、徹底した勉強家であるということである。

つまりは親子に渡って競技の道を究めようとした環境にあり、かつ勤勉に日々精進し、  
自宅に帰ってからのトレーニング、親子でのプランを遂行していたからだ。父・節夫先  
輩の事後談にもそれは綴られている。

「裕司は本当に勉強家だ。どんない遅く、疲れて帰宅してもトレーニングを欠かさない。  
自分なりの考えを交わし、より理解を深め、熟達していった。・・・」

こういった地道な、そして確実なトレーニングが「親子鷹」伝説として実を結んで行  
く。できあがったスタイルが「高速ターン」である。

そう、ある意味、室伏親子と共通する発想だ。

「体が大きく太く、剛腕で投げるのではなく、回転のキレと不動の軸運動で投げる！」で  
ある。

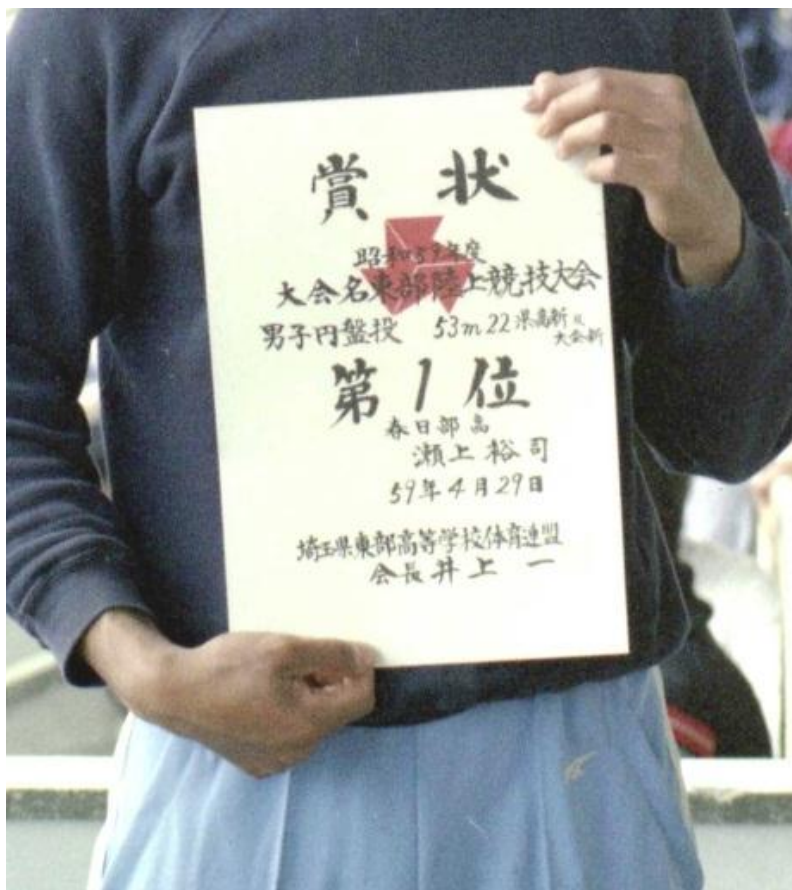
巨漢の投擲選手に対抗するため、構築された「テクニックとスピード」理論。

瀬上の投擲は、体重移動、軸回転、その結果高いスピードで放たれ、群を抜いていた。

そのため瀬上の投擲テクニックは、  
マスコミにも評されたほどだ。



四月の東部地区で早々に53mを投  
げ県高校新記録をあっさりと更新。  
次の県大会では55mに迫る体投擲  
を見せた。



★秋田総体決戦 奈良の小川 埼玉の瀬上

2年生の名古屋インターハイ以来、ビッグゲームでは負けていない。ライバルはもちろんその名古屋インターハイ砲丸、円盤2冠の奈良添上高校の小川選手。

関東インターハイの表紙もつとめた瀬上は砲丸、円盤で頂上対決の秋田へと臨む。



2年生の名古屋インターハイは東海道新幹線だった。しかし今年は東北・秋田。当時、東北新幹線が開業してまだわずか・・・緑の新幹線に私もワクワクしたものだ。いまでこそ存在しないが、「ビュッフェ」というレストラン車両があった。500円だけしか持っていない瀬上と私はすっかり舞い上がってしまい、ジャージ姿の二人が注文したのは「スープ」だった。これも大切な青春の思い出。(^^)v

盛岡までは着いたものの、そこからは在来線。これが数時間続いてかなりきつい。日本海側へいくまでかなりの昇り降りをした線路であった事に小原先生も驚いていた。

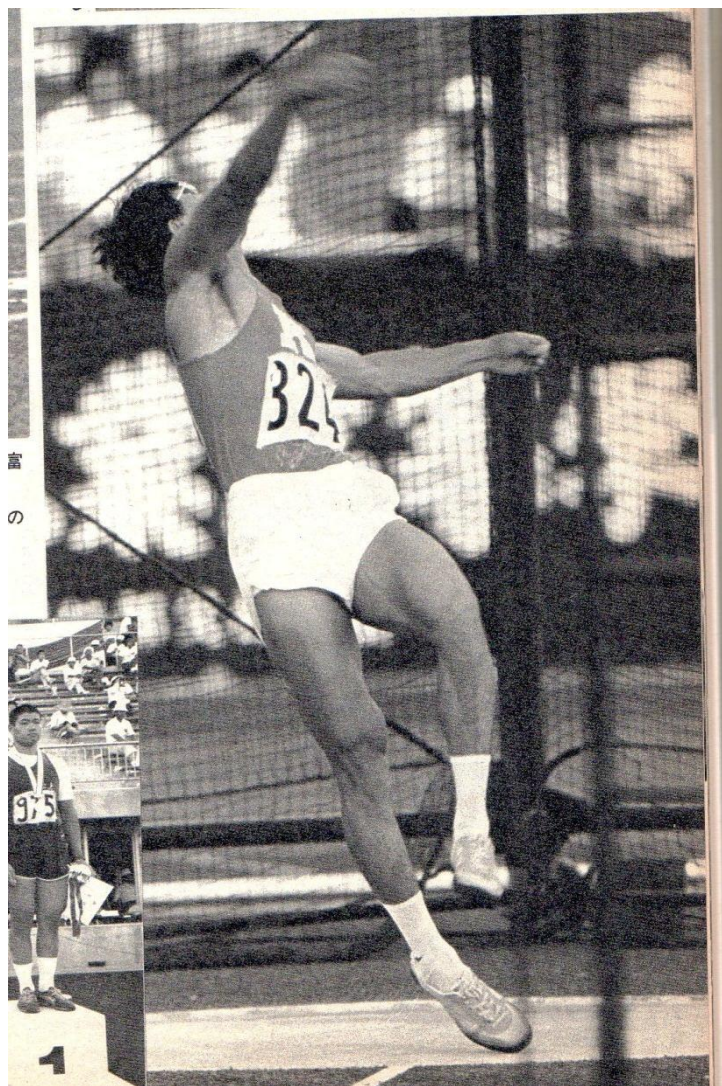


瀬上は埼玉選手団全体の騎手もつとめた。私は最後列観客席側。

「頭(かしら)、右！」の掛け声に緊張したものだ。

この後、地元竿灯まつりのエキビジョンが行われ、会場は和んだ。

## ★円盤投げの激闘

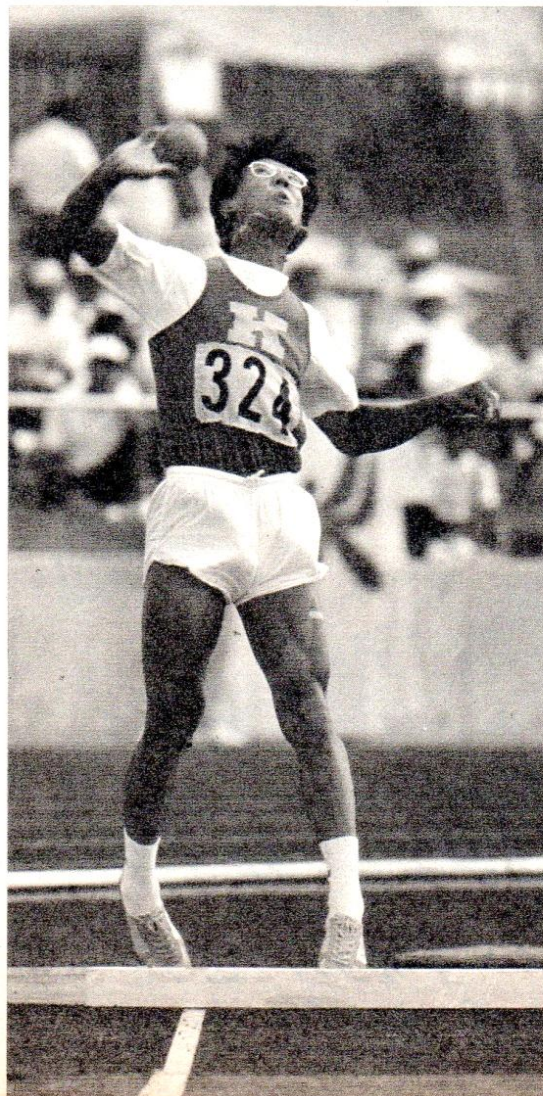


我々は第二コーナーの外周に陣をとり、熱戦を見つめた。

他の競技は一切気にならないくらい私も緊張していた。最初の3投で50mを大きく超えたのはやはりこの二人。瀬上がいちど逆転してトップに！春高陣も沸く。しかし、さすが昨年二冠の小川選手、気合が入り再びトップへ返り咲いた。瀬上は準優勝。

二人とも追い風に阻まれ、自己記録には及ばなかった。50m以上の選手たちには、やや向かい風のほうが円盤と槍は明らかに好条件になる。とくに瀬上はスピードを身上とするので風の浮力を得られれば・・・と見ていて残念に思った。

クして3位となった



◀瀬上裕司（春日部）は16m52で2位、円盤投とともに小川（添上）のカへは破れたかった

今度は砲丸投げ。

瀬上は円盤投げの戦いで疲れていた感があったが、それは皆同じこと。口にしても仕方ない。5投目を終わって納得の投擲ができないようだった。しかし、気を集中し、放った6投目は大きく伸び、2位へ！逆転準優勝を飾った。自己記録に肉薄する満足のいく投擲だった。

「やったー！！」

春高陣営から大きな歓声が上がった。

★総合5位 ライバルは・・・？

春高は総合5位入賞！小原先生の配慮で私が賞状を受け取りに行かせていただいた。  
一生忘れぬ大感激である。



男子円盤投げ表彰式  
春高にとってまた輝かしい一頁  
が作られた。後ろで見ている私も  
感動と興奮に包まれていた。

奈良添上高校は、ライバルの小川選手は2冠、高跳びの井上選手も優勝し、3冠獲得し総合初優勝。90年代にかけて無敵の強さを誇った添上時代の始まりであった。



月刊誌での小川選手の優勝コメント  
「瀬上くん、等々力くんは気になっていた」  
「瀬上君に抜かれた円盤はあせった」・・・とコメントして  
いる。  
砲丸投げ順位  
1、小川（奈良・添上）  
2、瀬上（埼玉・春日部）  
3、等々力（愛知・名古屋学院）  
インターハイ招集所に行ったとき、この二人は大きいな・・・  
と私も驚いたものだ。二人とも94キロもの堂々たる体格。  
瀬上とは20キロもの体重差があるのが印象的であった。

瀬上はこの2種目準優勝の活躍で日中ジュニア大会へ日の丸をつけて出場した。

★高校新記録更新

秋に入ってついにライバル小川選手が大記録を打ち立てた。

円盤投げ 高校新記録 59m54 小川智央(添上) 1984

この記録は20年以上も破られることがなかったほどであった。

10月の奈良国体で戦う相手は、今度は高校記録保持者となった。

瀬上に静かな闘志がわき上がった。

## ★高校記録保持者とリターンマッチ

小川選手にとっては地元奈良国体。万全の態勢で構えていることは疑う余地もない。しかし、瀬上は冷静だった。後日、本人から聞いた話では「夏は追い込み練習で疲労が抜けなかったんだ・・・実は。」やはり疲れていたのだ・・・

そして「もう大丈夫・・・楽になったから」。

重圧からくる緊張と過剰トレーニングというのは一流選手にはつきものなのか・・・やはり相当なプレッシャーを、インターハイでは感じていたことがあらためて理解できた。やはり全国を獲りに行く・・・というのは生半可なものではない。

奈良鴻池競技場 瀬上は他を圧倒する投擲を見せた。



昭和59年 奈良国体優勝  
瀬上裕司選手

国体制覇。

ライバルは総体投擲2種目連覇、そして20年は破られぬ高校記録保持者であったが、見事に抑え、瀬上は全国制覇を成し遂げた。

春高8人目の全国の覇者。小原先生の春高監督最後の年に打ち立てた大きな輝きだった。同期はそのニュースでわきかえった。いろいろな自分達の事も含め、春高時代に大きな区切りがついた気がした秋であった。

高校新記録との戦い その3へ